

第60回

奈良県社会科診断テスト報告

奈良県小学校教科等研究会社会科部会

目 次

はじめに	3
社会科診断テストについて	4
各学年の考察	
3 年	6
4 年	12
5 年	18
6 年	25
令和3(2021)年度の診断テストをふりかえって	32
アンケート集計結果	41
編集後記	43

はじめに

昨年度は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、本研究会の活動のほとんどを中止せざるを得ませんでした。昭和36年に第1回を実施して以来、途切れることなく59回にわたり続けてきた奈良県社会科診断テストも例外ではありませんでした。特に、昨年度は新学習指導要領完全実施の年であり、新しい診断テストづくりに意気込んでいただけに、非常に残念なことでした。

ここに2年ぶりとなる令和3年度社会科診断テストを実施し、その結果分析と考察をまとめることができました。ご協力いただいた皆様方に厚くお礼申し上げます。

本研究会では、今年度より研究主題を新しく「社会がわかり、よりよい社会のあり方について問い続ける力を育てる社会科学習 ～見方・考え方を働かせてねり合い、選択・判断する学習を通して～」としました。コロナ禍の中、例年のような取組はままなりません。可能な方法で実践研究を進めています。本部会の取組のもう一つの柱である診断テストは、研究主題に基づいた社会科の学力の定着を評価する手がかりの一つとしての役割を果たしており、本診断テストの目的は次の通りとしています。

①社会科学習の成果を評価するとともに、学習指導上の課題を見出し、その改善の方策を考える。

②県小社研の研究主題に関わる課題を探り、研究の深化を図る。

さらに、次の二つの研究テーマをもたせ、目的に迫ろうとしています。

○社会科の基礎・基本が明らかになる評価テストの研究と問題開発

○指導と評価の一体化をめざした観点別評価テストの開発

本診断テストにおいては『基礎・基本』の問題として「知識・技能」に関する内容を、『活用』に問題として「思考・判断・表現」に関する内容を出題しています。また、新学習指導要領には「思考力、判断力」とは、「社会に見られる課題を把握し、その解決に向けて、学習したことを基に、社会への関わり方を選択・判断する力」であり、「表現力」とは「選択・判断したことを説明する力や考えたことや選択・判断したことを基に議論する力」とであるとされています。これらの力を診断するために、具体的な場面を想定しながら「社会的な見方・考え方」に基づいて、問いを作成し、記述式解答問題を設定しています。

本テストで測ることのできる学力は、社会科の学力の一部ではありますが、問題と診断結果の分析をもとに、奈良県の子どもたちに必要な学力をつけるための指導の在り方を示すことができると考えています。

最後になりましたが、本診断テストの実施にあたり、県下の各市町村教育委員会には、多大なご支援・ご指導を賜りました。厚くお礼申し上げます。また、本診断テストをご採用いただいた各小学校の先生方のご協力に心から感謝申し上げます。この報告書が県下の多くの小学校で活用され、社会科の授業がさらに充実・発展していくことを願っています。

令和4年1月20日

奈良県教科等研究会社会科部会
部会長 稲浦 聡

社会科診断テストについて

1. 診断テスト実施の目的

- (1) 社会科学習の成果を評価するとともに、学習指導上の課題を見出し、改善の方策を考える。
- (2) 県小社研の研究主題「社会がわかり、よりよい社会の在り方について問い続ける力を育てる社会科学習 ー見方・考え方を働かせてねり合い、選択・判断する学習を通してー」に関わる課題をさぐり、研究の深化を図る。

2. 作問について

診断テストの問題は、別表の専門委員が分担し、次の基本方針に基づいて作成した。

- (1) 児童の学力診断をいっそう確かなものにするため、『基礎・基本』（「知識・技能」）と『活用』（「思考・判断・表現」）の2種類の問題を出題した。
- (2) 4年生では地図帳を活用する問題を設定し「知識・技能」をより分析的に診断しようとした。
- (3) 『活用』の問題については、記述式解答形式を採用し、一部の問題では傾斜配点を行った。
- (4) 出題範囲は、前学年の12月～3月（3年は除く）、及び学年の4月から11月までの学習内容とした。（東京書籍・日本文教出版・教育出版年間指導計画に準拠）
- (5) 問題数は18～20問とし、45分で解答できるよう配慮した。

3. テスト実施について

- (1) テストの実施日は、11月30日を原則とした。
- (2) テスト実施校は、82校（実施率40.4%）であった。
- (3) 受験児童数は、14,382名であった。

4. テスト処理について

12月9日までに提出された集計については、12月12日に集計処理を実施した。報告については、毎年2月の「奈良県小学校社会科冬季研究大会」で行っている。

処理結果については、後述の通り、各学年の報告のはじめに、集計結果表、出題の意図と観点、全体的な傾向を述べ、大問ごとの考察においては、主な誤答とその原因解決のための対策例などを記すことにした。なお、追跡調査を行い、より詳細な分析・考察を加えるため、一定数の学級を抽出して処理を行った。得点分布表をはじめ、各考察を熟読していただき、今後の社会科の指導に活かされるようお願いしたい。

5. 標準偏差値と信頼度係数

事項		学 年			
		3 年	4 年	5 年	6 年
平 均 得 点		77.28	65.02	67.75	65.74
標 準 偏 差		16.64	23.46	19.36	21.36
信 頼 度	折 半 法	0.78	0.86	0.80	0.84
	クーダー・リチャードソン法	0.73	0.83	0.77	0.81

この診断テストを作成するにあたっては、毎年の集計結果をコンピューターで処理し、実施した診断テストの問題に信頼性があるかどうかを検討しながら、次年度に生かすようにしている。その信頼度を測る方法として、折半法やクーダー・リチャードソン法を用い、その信頼度を係数で表したものが上の表である。

○折 半 法

全体を奇数番号の問題と偶数番号の問題に折半し、その双方の得点間の相関係数を求めて、このテストの全体の信頼度を求める。

○クーダー・リチャードソン法

問題数と標準偏差、各問題の正答率・誤答率から、そのテスト全体の信頼度を求める。

いずれの場合も、信頼度係数が高くなるほど、そのテストの信頼性は高くなるわけであるが、係数が0.7以上あれば、テスト全体に信頼性があるといわれている。

また、テストの内容が、その指導目標から見て適切であるかどうか、問題の困難度は適当であったのかどうかという内容の妥当性にも検討を加えながら、社会科診断テストの問題作成にあたって